

## 大船渡市災害復興計画策定委員会委員からの意見・提言

1000年に一度と言われる巨大津波の襲来により、激甚の災害を受ければこそ、小手先でなく、大胆に津波の心配のない大船渡をつくるべきチャンス、津波災害を今回で絶つ。復興計画策定委員会は学識経験者、大学教授、防災専門家、各界各層の民間人による卓越したシンクタンクである。必ず目的に叶った計画が出来ると思っている。

計画が『実現』出来るか、否かは、おそらく膨大な予算になると思うが、二次、三次の補正予算付くか付かないかで決まるが、付けて貰うよう最善の努力が必要である。絶対に必要である。

‘絵に画いた餅’にならないように是非願いたい。そうでないと、委員会設立の大義がなくなる。

国立公園の碁石海岸始め、素晴らしい自然景観の豊かな観光資源がある。近年は、食べ物の開発も盛んであり、椿寿料理、椿寿弁当、黄金海鮮弁当、恋し浜ホタテバーガー、さんまラーメン、さんまバーガー等が開発され、食文化は豊富な地場産品の食材を最高に生かしたものである。

大船渡型グリーンツーリズムで体験観光が出来る。市内に民宿含めて1000人足らずの収容能力は絶対的に施設不足であるので、300人程の収容能力のホテルの誘致が是非とも必要である。恵まれた自然を最高に生かした観光で経済振興を、巨大津波を、学術研究や国際防災会議等を、観光とドッキングさせるのも価値のある企画と思う。

復興のための経済の振興は不可欠であるので、インスタントラーメン工場を誘致すべきである。全世界のインスタントラーメン消費量953.9億食、日本からの年間輸出量5,980万食である。知事は豊かな地域資源を活用し、食産業を世界有数のものに発展させたい、水産業を中心とした食産業の振興に力を入れている。三陸の海は具材の宝庫、岩手は野菜、小麦粉も十分に供給出来る。大船渡港のコンテナ航路でアジア中心に世界に輸出することも出来る。海も陸も港湾、三方良しであり、雇用も発生する。

～商店街のあり方～従来どおりでは、ただ衰退あるのみ。大災害を契機に繁栄するように生まれ変わらないと借入金を返すことは出来ない。観光客始め市外から、お客様を呼べるような商店街づくりが不可欠である。商売は立地産業であり、商業集積が絶対条件である。核店舗は是非必要。公共的施設(病院、公会堂、役所、養護施設等)公園、遊園地、野外劇場等々と、三陸・大船渡ならではの品揃えの店舗が中心にならなければならない。例えば、湯布院、長野の小布施、小樽の商店街等が繁盛している商店街であります。候補地としては、大船渡病院(流動人口3,000人?)を核として可能ではないか。もう一つの考え方は大船渡の商店を盛町、立根町に集約して大胆に前述した施設をレイアウトしての新しい商店街が出来るのではないか。東西南北に土地が余裕があるので、魅力がある。但し、大船渡の人達がYESと言うか?小異を捨て、大同に付くことが条件である。

～過度の自粛が経済を縮小する～全国で大震災の被害者を思いやって、観光のキャンセル、様々な行事の中止などの自粛が見受けられるが、過度の自粛が経済を萎縮させて復興に支障を生じさせかねないので、全国の皆さんには配慮を賜りたい。

一番重要なのは、津波が襲来しても人が死なない、財産が流されないのが根幹の目的。各地域に合った方法を学者、専門家に相談し、決断すべき。このことを早く優先して、決断すべき。

あとの核の部分は順次決まってくる。震災後3ヶ月過ぎて、全く先が見えない分からない、決まらない、のでは動きようがない。どのような状況でも被災者は生活を立てて行かなければならない、生きて行かねばならない。

計画が策定されたら、実現出来るよう、あらんことを考えて、予算を獲得しよう、知識ある人間、同じ災害を繰り返してはならない。予算獲得のため、命を懸ける、あるいは国会前で、デモンストレーションをやる覚悟で取り組んで欲しい。予算が付くか、付かないかではなく、何が何でも付けて貰う気概で取り組むことが肝要ある。……災い転じて福となす……

気仙医師会は大船渡市、陸前高田市、住田町に住む医師で構成されている。大船渡市だけでなく、二つの自治体の住民が健康に生活できるように医療活動をしている。医師会会員は開業医が多いですが、大船渡病院や陸前高田病院の医師も一緒に気仙地域の医療を担っている。今回の震災で御存知のように、陸前高田市の医療施設が壊滅状態です。生活弱者と言われる老人子どもの健康が心配されておりますが、災害時の緊急医療に関しては全国から医師や看護師、薬剤師、保健師の医療団が沢山支援に来た。しかし、この方々は滞在が限られている。この地方だけで自立する時期がきている。この際是非、気仙全体での医療環境を考慮した整備をお願いする。

具体的には、現在広域連合で介護保険の審査会をしているが、乳幼児の検診や予防注射もこの連合の事業とすべき。一人でも多くの子どもが健康に育つための医療行政・それに伴う行為は、この地方の将来に大きく影響するはず。現在大船渡市で行われている乳児健診と予防注射の制度は全国的に見て、遅れていない。陸前高田市、住田町は行政が違うことで、やや、子どもの負担になっている制度が残っている。窓口を一つにすることで、かなりの子どもが助かり、将来の健康に繋がると思う。

また、3つの県立病院があるので、ぜひ、有効に利用できるように県や医療局と十分に協議して戴きたい。

大船渡病院は中核病院としての機能が十分に活かされるように、救急、重病を受け入れる病院として利用する。大船渡病院での高度・救急の状態から落ち着いたとき、自宅に帰れない場合の治療所として「療養施設」があるが、気仙にはこの病床がない。また、回復の可能性が有る場合(脳梗塞や脳出血の後遺症)リハビリ施設を持った病院が気仙にはない。高田病院の再建に是非この構想を入れて欲しい。大船渡病院の理学療法科はスタッフが足りなく、専門スタッフも不足です。

精神科、神経内科のスタッフも足りない。高田病院にはこの設備も併用して欲しい。気仙が一つになって医療制度を考えるととても良い機会だと思う。

開業医は是非住民の「かかりつけ医」として利用して貰いたい。

軽少な症状や、心配事の相談医として活用して欲しい。難病が疑われたら、大船渡病院をお願いすることになる。開業医とこの3つの県立病院が上手く連携が取れるのも、住民の皆さんの活用の仕方だと思う。

上述の医療機関の利用を円滑に出来るためには、交通網が大切である。住田町と大船渡は時間がかかり過ぎ。白石トンネルがあまりに高いところにある。(40年前よりはよいですが...)かなり下のところに近道があると思う。トンネルは必要ですが...。権現堂橋から15分で住田役場に行けるのではないかと思う。陸前高田市のアクセスは、工事中の道路の完成が待たれませんが、同時に45号線の整備が必要です。

また、東北高速道路に結ぶ道路の整備が遅れている。県庁所在地の盛岡まで、バスで2時間半。40年前と同じである。荷沢峠もあの峠まで上がらなくても、住田町を過ぎたところから、宮守に抜けるトンネル道路が出来ると思う。1時間半で盛岡に行ける事を願う。

JR大船渡線の整備には、相当な時間がかかると思われるが、その間、水沢江刺駅または、新花巻駅、一ノ関駅にJRバスを走らせる構想はあるのか? 県交通とも相談の上、1日5~6往復の運行は出来ないものか?

三陸海岸は、全国でも世界でも、こんな素晴らしい風景の海岸は滅多にない。碇石岬、広田半島、椿島、高田松原。岩手県沿岸の観光として、盛岡駅に宣伝が出ているのは、浄土ヶ浜、北山崎などである。碇石海岸に観光バスが行けるような道の整備が遅れている。ベイブリッジのような橋を「丸森」から

赤土倉に架けてみる。兎に角、道路の整備と漁港の整備を急がなければならない。災害復興のついでに将来を考えて、より発展して皆に愛されるまち作り環境作りを考える絶好のチャンスである。ゼロ以下の状態なのである。ゼロ以上に上がるために、現状まで戻りだけではなく、以上になることを考えてみませんか。ホテルや催し会場がない。飛鳥からおりた人々が中尊寺まで行かなくても良い大船渡・気仙を作ってみませんか。

今回の震災で、命のもらさをイヤと言うほど感じた人は大勢いる。

災害が怖いこと、生きるための咄嗟の知恵、助かったときの感謝の気持ち、一人ひとりが大切だけれども、皆で助け合って生きていくことの素晴らしさ、毎日の平凡なこの日本の生活のありがたさ、大切な人を亡くした悲しみ、などなど、今回の体験を通して教えることが沢山ある。子供達へのまたとない教材である。教育は、家庭・学校・社会が一体となっていくことである。語り伝え、皆でこの教訓を大事にして、次世代に引き継いでいきたい。

土石による嵩上げは、恒久的な地盤となり、100年先のまちづくりに柔軟に対応できる方法である。RC造等による人工地盤は、老朽化や耐用年数による建替えを余儀なくされるため、公共的な施設のみとすべきである。

なお、住宅の高層化は阪神大震災で孤独死や街の空洞化を招いた事例があるため、コミュニティ崩壊を招く高層化の計画はすべきではない。

50年前のチリ津波後の復興のとき、赤崎町八坂橋附近、生形地区で高かった県道を挟んで、山側、海側共に土で嵩上げた実績を見ている。特に山側は深い所で5m位嵩上げし、現在の街が形成されていた。

防潮堤には、車両通行の暗きょゲートは、造るべきではないと考える。高架ループ型式や、防潮堤と並走して堤を越える方式はいかがか。人の通行はスロープや階段、トンネル(開口が少ないので)方式とし適宜設ける。

防災センター(大船渡消防署)は、今回の震災を受け設置場所を見直すべき。魚市場、工場地帯を見据えた、大船渡中央インターを明神前附近に設け、ICのより近い所に建設すべきである。

尚、大船渡病院前の道路を延伸し、市役所～リアスホール間の山を削ることで(嵩上げの土取り場となる)、新たな敷地を確保できよう。

床上浸水した大船渡小学校は、学校としては相応しくなく、大船渡北小学校を一時的に利用し、大小校舎を以下の仮施設として活用すべきである。豊富な教室は階ごとに公共的施設や、商店街などに。体育館やグラウンドは朝市やフリーマーケット、駐車場などに利用できよう。

国道45号線に面した校舎は利便性もあり、子供からお年寄まで幅広く利用でき、地域コミュニティや商業の蘇生につながると思う。

#### 大船渡町地区

・2m未満の津波には、湾口防波堤および防潮堤が大きな効力を発揮する。今後も設置する必要性を感じる。

・松島の被災状況から何かを得ることができそうである。点在する島。力の分散。人口の島を築造する。その島を橋で結び釣りや観光の名所とする。もし、人工島が可能であれば湾口防波堤の築造はせず自然的な津波軽減のメカニズム環境を創り出す。

・企業の社屋や住宅の損壊に大きく影響を及ぼしたのが丸太である。丸太の流出を防ぐために、浸水区域外への持ち出し保管をさせる。もしくは埠頭用地ならびに工場用地内に保管施設を建造することを企業への義務付けとする。

・理想は、国道45号線を津波浸水高さまで盛土し、大船渡線の鉄道と併設させる。国道より山側を住居地域とし、海側を工業用地、海浜運動公園用地とする。国道45号線の横断は平面交差とせず、立体交差が望ましい。

・現在運動公園用地として計画されている場所は住宅地として利用する。できれば、高層マンションを建設し被災された方々の居住団地を形成する。

・大船渡町内の小学校は北小学校に統合する。大船渡小学校跡地には、大規模多機能市営体育館を建設し、市民スポーツはもとより災害発生時の支援センターとして活用する。

#### 赤崎町地区

・赤崎地区の幹線道路既設大船渡赤崎綾里線とは別ルートで山側に道路を建設する。現存する赤崎林道を抜本改良し、中井地区から合足地区までのルートを建設する。

・住居区域については、新規の県道に沿って形成されることが望まれる。

#### 末崎町地区

・人工島築造により自然的な津波軽減のメカニズム環境を創り出す。併せて強固な防潮堤の築造が望まれる。

・浸水区域内住宅建設の規制を設定する。

・太田団地は盛土し、住居地域として再構築する。他地域については、浸水地域外への移転が必要になる。

### 三陸町地区

・吉浜地区の津波防災事例に倣う。生活区域を高台に設け、生産区域を防波堤裏面に設ける。前面には大型防波堤を築造する。  
・綾里、越喜来を結ぶ幹線ルートの早期完成が望まれる。  
・学校は地域の核施設である。津波の到達不可能な高台に建設されることが望ましく、併設して多機能施設(住民が自由に使用でき、カルチャースクール等の催し物が開催でき、非常時には避難場所として使用できる地域公民館等)の建設が必要である。

子供が通う学校が被災することほど悲しいことはない。子供の安全を確信することが大人の行動の安全性を生み出す。これでもかというくらい高台に建設してほしい。学校から見る夏祭りでの花火は格別だというくらい。

避難するのに時間がかかることもあり得る。所々に高層RC建築物が点在していると便利だ。普段は商業施設であっても非常時の避難場所に設定する。もしくは市や県の避難施設を建築しておく。運動公園内に展望台とかショッピングセンターとかが5棟ぐらいあれば楽しいと思う。当然のことからショッピングセンターには地元の商店の方々が入れれば越したことがない。

自然エネルギーの活用は今後急速に伸展される。太陽光、風力などは三陸沿岸の特性を大いに利用できる。震災発生当時停電で不自由な生活が長期間にわたって余儀なくされた。電信柱、発電所からの送電などは今後別物に取って代わるべきものと考ええる。

常時車で避難する場合、交通渋滞を防ぐ為の方策を策定しておく必要がある。たとえば、車での避難場所の経路を300m毎に案内標識を設置する。徒歩での避難者にもどこが避難場所かを標識で判るようにする。広報等により避難のルールを全市民に周知する。避難場所の選定には、陸前高田市のようなことには絶対ならないようにしっかりと検討する。

人工島の建造については、ファンドを設定して多くの方々から資金の提供をいただく。参加者には季節毎に放射能汚染されていないという安心印の付いた三陸の海の幸を提供する。わかめ、ホヤ、ます、うに、さんま、さけ、タラ等ファンド参加者は大いに満足すると思う。

高台への移住に必要な資金は、土地交換することにより市民への負担がないようにし、住居の新築にも県産材の利用補助や被災補助を最大限に利用できるようにする。

1,000年に1度の大地震に遭遇し、自分が生きている時にまさかと思っている人がほとんどだと思う。現実をそのまま受け入れることは難しいけれどもそれを素直に受け入れ、これから私たちはどのように生きていくべきなのかをじっくりと考えていきたい。じっくり考える余裕などはないと言われるかもしれないが、じっくりゆっくり時間を掛けて進むべきと思う。突拍子もないことを前述したが、早期に復興計画を策定し前進していく途中でたまには後ろを振り向きながら再考する必要があると思う。基本的には、この街を津波から守ると共にいつまでも活気に満ちた活力のある街であってほしい。そのための復興計画でならなくてはいけない。片手落ちのものではこれから担う子供たちに禍根を残すことになる。